

北東アジア

環日本海経済研究所

3

中露国境都市・綏芬河市の今昔

中露両国は長いあいだ対立関係にあったが、その状況が変化し始めたのは冷戦終結の時期である。初めの頃、ロシア側はひどい物不足の時代で、

野へと広がっている。

対する需要は大き々、両国間経済交流で最も目立ったのは、小規模な貿易業者による「担ぎ屋」商売の存在であった。ところが、近年の中露地域間経済交流は、伝統的な国

境貿易にとどまらず、物流・農業を含む幅広い分野へと広がっている。

4314 kmに及ぶ中露国境線のうち、中国側国境線の7割に相当する3088 kmが黒龍江省内にある。同省には25カ所のある。同省には25カ所のぼる対露国境通関点（口岸）があるが、これは全国で最も多く、その中で特筆すべきは鉄道口岸と道路口岸をもつ綏芬河市の存在である。人口

17万人ほどの国境の街だが、その面積は460 km²しかない。しかし、2010年の対外貿易総額は60・5億ドルに達し、黒龍

江省の貿易額全体の4分の1を占め、1人当たりGDPは67988元（約1万米ドル）である。

綏芬河市街の特徴は、ロシア語の看板が溢れ、ロシアレストラン、ナイトクラブ、お土産の店が多く、ロシア人観光客で賑わっていることだ。

「ロシアがくしゅみをすれば綏芬河は風邪をひく」といわれるほど、対露ビジネスはこの町の「生命線」ともいえる。

1990年代以降、筆者は定期的な綏芬河を視察してきたが、訪ねるたびに町全体が逞しさを増している気がする。この活気を支える力が何かを考えると、「マーケティング力」「ロシア語力」「行動力」の3点を挙げることができ

を懸命に考えてマーケティングを開拓していく商人が多い。そして、商品企画・販路開拓のためにロシア語力は必要不可欠だが、「綏芬河人」なら普通の行商人でさえも片言のロシア語で価格交渉に挑む。さらに、アイデア・改善策を徹底的に実行に移す民間および地方行政の「行動力」も街の活気を支える重要な要素である。

対露ビジネスで鍛えられてきた商業都市・綏芬河は、「担ぎ屋」が活躍した時代から脱皮し、今後は日本、韓国を含む北東アジア諸国との貿易拡大およびロシア極東港湾を経由した国際物流ルートの構築を望んでいる。

その行動力が早速表れ、昨年に韓国ソウルに事務所を構え、積極的に動き出している。日本もこの中露国境都市の新たな動きに注目し、商機を見極めてほしいものだ。



綏芬河市対露ビジネスのシンボル
年商数十億円のデパート「青雲市場」
(撮影・朱永浩)

（環日本海経済研究所
調査研究部研究主任 朱永浩）